

【登場人物表】

太田夏輝（13）（15）

ボードゲーム部1年

安久夏希（15）

ボードゲーム部1年

久坂道朔（14）（16）

元ボードゲーム部2年

山田京子（16）

元ボードゲーム部2年

船木浩二（16）

ボードゲーム部2年

西村智也（16）

ボードゲーム部2年

佐々木慎也（17）

ボードゲーム部部长

岸洋輔（18）

元ボードゲーム部部长。大学生。

石葉菜緒（16）

バドミントン部2年

前川舞（17）

バドミントン部3年

宮下翔太（17）

舞のクラスメイト

飯倉千綾（15）

夏希のクラスメイト

石葉文花（15）

菜緒の妹。夏希のクラスメイト

海老名結花（12）

太田の中学時代のクラスメイト

店長

生徒

○ 富野高校・ボードゲーム部部室

机の上にカードが出されていく。

出されるのは、人間のイラストが描かれたカード4枚。
アンドロイドのイラストが描かれたカード1枚。電気
羊のイラストが描かれたカード4枚。順不同。

太田夏輝(15)、手持ちのカード1枚を見つめている。

夏希「太田君！」

太田、カードを机に置き、立ち上がる。

イラストがなく「羊」と大きく字が書かれたカード。

黒板に「ボードゲーム部 新入部員歓迎会」の文字。

黒板の前の太田と安久夏希(15)。

座って2人を見ている佐々木慎也(17)、船木浩二
(16)、西村智也(16)。

夏希「じゃあ、私から。1年の安久夏希です。先輩には仮入部期間
からお世話になっているので、私の自己紹介に代わりまして、太
田君に先輩紹介をしたいと思います」

船木「なんでだよ」

夏希「はい。今、ヤジを入れたのが2年の船木先輩です」

船木「船木だ。よろしくな」

夏希「(佐々木を指し) 部長の佐々木先輩。唯一の3年生」

佐々木「よろしく」

夏希「(西村を指し) 2年の西村先輩。ボドゲに一番詳しい」

西村、黙って頭を下げる。

夏希「以上かな。じゃあ、太田君、自己紹介よろしく」

船木「雑だな！」

太田「1年の太田夏輝です。よろしくお願いします」

夏希「雑だな」

船木「人のこと言えないよ」

太田「質問、1つしてもいいですか？」

夏希「もちろん。何でも言って」

船木「なんで夏希ちゃんが答える側なんだよ」

笑みがこぼれている佐々木、船木、西村。

太田「久坂さんに何があつたんですか？」

夏希、太田を見て

夏希「……いや、久坂さんってだ……」

夏希、太田から視線を周りに移す。

佐々木、船木、西村から、笑みが消えている。

太田「変なこと聞きました。すいません」

口をつぐむ太田、唇をかみしめる。

○ 同・1年1組教室

ノートに「久坂さん」と書かれている。

ノートに向かっている夏希。

千綾「金曜、どうだった？」

夏希、顔を上げると飯倉千綾（15）が立っている。

教室内には弁当を食べてる生徒や、談笑している生徒たち。

夏希「なんか変な雰囲気になった」

千綾「え、暴力？」

夏希「違うよ。違うけど。同期がいたんだけど」

千綾「夏希以外にボドゲ部入る人いたんだ」

夏希「だから、もうその人は辞めたんだって」

千綾「ごめんごめん」

夏希「で、その同期、太田君って言うんだけど、先輩たちに質問したの。『久坂さんに何があつたんですか』って？」

周りの一部の生徒が夏希たちを見る。

夏希、視線を感じた方を向くと視線を逸らされる。

千綾「……久坂さんって、もしかして」

文花「安久さん、ちょっと」

近づいてくる石葉文花（15）。

○ 同・1年廊下

壁際まで無言で歩いてくる文花に続く夏希。

夏希「どうしたの？」

文花「久坂って、名前出さない方がいいと思う」

夏希「石葉さんはお姉ちゃんが2年生なんだっけ？」

文花「そう。だからいろいろ聞いている」

夏希「じゃあ、やっぱり」

文花「もともと1クラスの独裁者みたいな感じだったんだって。でも文化祭の後に暴力事件を起こして停学処分。そこからエスカレート。目、つけられたら学校生活終わるよ。それだけ」

教室に戻っていく文花の後姿を見つめる夏希。

○ 同・ボードゲーム部部室

机の両サイドに羊、電気羊のカードと人間とアンドロイドのカードを分けて置いている。

船木「プレイヤーは人間サイドと羊サイドに分かれて勝負する」

机を挟んで座っている太田と夏希。船木が太田の横、佐々木が夏希の横に立っており、西村が少し離れて座っている。

佐々木「人間サイドはアンドロイド1枚、人間4枚。羊サイドは電気羊4枚と羊1枚。5ラウンドでそれぞれ出し合うんだ」

佐々木が羊サイド、船木が羊サイドのカードを取る。

船木「人間と電気羊は勝負つかずで、アンドロイドは羊に勝てて、羊は人間に勝てる」

佐々木が羊サイドのカード、船木が人間サイドのカードを出していく。

夏希「これ、イラストも自分たちで描いたんですよね？」

佐々木「そう。太田君にも説明すると、ボードゲ部の活動の一つで、文化祭に自作のボードゲームを出してるんだ。これは去年の3年の先輩が作ったんだ」

盤面に「羊」のカードが出る。

太田「なんでこのカードだけ文字なんですか？」

船木「ああ、文化祭でなくしたんだ」

バンッと立ち上がる西村。

夏希「あ、もしかして、西村先輩がなくしたんですか？」

西村「……違う」

太田「久坂さん？」

西村「お前は気にしなくていい！」

船木「西村！ 後輩にそんな言い方ないだろ。太田君、ごめんな」

ばつが悪そうに座る西村。

佐々木「久坂がまだボドゲ部にいた時になくした。それだけだよ。

さあ、羊と人間、どっちやる？」

夏希「え、ああ。私、羊やろうかなー。太田君は？」

太田、立ち上がり

太田「すいません。帰ります」

去っていく太田の後姿。

○ 同・昇降口

太田、靴を履いて歩いていこうとすると肩を叩かれる。

太田のうしろに夏希。

太田「安久さん？」

夏希、茶色のタッセルローファーをしつかりと履き

夏希「駅前のカフェで苺パフェやつてるんだ。今週末でだからさ。

付き合ってよ」

太田「部活は？」

夏希「用事あるって抜けてきた。さあ、パフェを食しにレッツゴー！」

夏希を追いかけていく太田。

○ フルーツパーラー（夕）

夏希のスマホに映る苺パフェ。

夏希の正面に、じっと考え込んでいる太田。

夏希「パフェ食べないの？ 私食べようか？」

太田「考え事してただけ。食べるよ」

夏希「考え事って、久坂さんのこと？」

太田「……そうだけど」

夏希「考えるのはいいんだけど、久坂さんって暴力事件起こして、

部活辞めた人なんですよ。先輩たちもあまり話したくなさそうだし。

だから部活内ではあまり話題に出さない方がいいんじゃない。

話聞く感じ、近づかない方がいい……」

太田「(遮り) 違う!」

夏希「……太田君は、久坂さんとはどういう関係なの?」

太田「中学の先輩だよ。久坂さんとの出会いは中1の夏から秋に変わって肌寒くなる、そんな季節の変わり目だった」

ぽつりぽつり語り始める太田。

○ 喫茶店・回想(朝)

スマホを耳に当てている太田夏輝(13)。制服姿にパーカーを羽織っている。

太田「(声を低くして) なんかね。熱が出るみたいで。季節の変わり目かなあ。ということで今日は、夏輝は休みますのでよろしくお願いします。はい。失礼します」

スマホをテーブルに置く太田。店長が近づくとスマホを渡す。

太田「スマホありがとうございます」

店長「ばれない?」

太田「迷惑はかけないっす」

太田、学生鞄からテキストを取り出し、勉強し始める。

久坂「さぼりか?」

太田の正面に、太田と同じ制服を着た久坂道朔(14)が立っている。

太田「遅刻しますよ」

久坂「今日は調理実習の日だからさぼっていいんだよ」

久坂、太田の正面に腰を下ろす。

太田「料理苦手なんですか?」

久坂「俺の班に両片想いの奴らがいてな。俺がいない方がうまくいくんだ」

久坂、太田のテキストを手に取り

久坂「中1か。1個下だな。何か困ってんのか?」

太田「困ってるとは限らないじゃないですか。調理実習の日かも」

久坂「さぼりが第三者から許容されてる。そしてさぼってやる事が勉強だ……言いたくなかったら言うな。悪かったな」

立ち上がる久坂。

太田「夏輝。俺の名前、太田夏輝です」

久坂「俺は久坂だ」

腰を下ろす久坂、笑みを見せる。

○ 森野中学・1年教室・回想

太田が教室に入ると視線を逸らす生徒たち。

太田N「当時、俺はクラスで虐められていた。クラスの女子のリーダー格、海老名結花、Yとしようか。Yがある女子を虐めていたんだ。それに気づいた俺はYにやめるように注意した。次のターゲットは俺だった。そして今度、俺を助けてくれる人はいなかった。俺は担任に相談した。けれど直接の暴力はないからと動いてはくれなかった。そこで親に相談して学校に注意してもらった。その直後は虐めも収まったが、暫く経ったら虐めが再開。いや、エスカレート。自然と学校に行く足は遠のいていった」

一人で座る太田を見て嘲笑する海老名結花（12）。

○ 喫茶店・回想（朝）

久坂の前で俯いている太田。

久坂「傍観者は加害者と同罪だ。夏輝、頑張ったな」

太田「……ありがとうございます」

久坂「夏輝、お前1年何組？」

太田「6組です」

久坂「じゃあ行くか」

立ち上がる久坂。

太田「でも、俺は、今日は」

久坂「調理実習は午後からなんだ」

久坂を見る太田。

○ 森野中学・1年教室・回想（朝）

学校に入ってくる太田に話しかけてくる生徒たち。

太田 N「次の日、学校に行くとか虐めは終わっていた。久坂さんが皆の前で Y を晒上げたらしい。それ以後も久坂さんが目を光らせてくれた。そのおかげで俺は安穩とした中学生生活を送ることができたんだ」

周りを気にしながら一人で座っている結花。

○ フルーツパーラー（夕）

苺パフェを食べている夏希の前に太田。

夏希「その海老名結花さんはそのあとどうなったの？」

太田「だんだんと孤立していったって、2 年にあがったタイミングで、気づいたら、転校していったよ」

夏希「いじめっ子の末路だね」

太田「でも転校したのは海老名結花だけじゃない。久坂さんも家庭の事情で、俺が 2 年の 2 学期に転校していったんだ」

夏希「そうすると、久坂さんの中 3 の 2 学期から今までの間に人が変わったってことだ」

太田「……謎は 2 つある。1 つは、なんで久坂さんは豹変したのか。

もう 1 つは、久坂さんは本当に変わってしまったのか」

夏希「謎ねえ。でも中学の時に何かあったら分かんなくない？」

太田「俺は、ボドゲ部に謎はあると睨んでいる。安久さんは久坂さんの噂をなんて聞いている」

夏希「ええと、ボドゲ部に暴力事件を起こして停学処分を受けて部活を辞めた人がいるって。その人は 2 年生で、今の 2 年や 3 年に恫喝をしてるだったかな」

太田「暴力事件がいつ起きたのかは知ってる？」

夏希「文化祭終わってから」

太田「部活に入る前、噂の真偽を本人に聞きに言ったんだ」

俯く太田。

○ 富野高校・2 年 4 組教室・回想

肩を震わせながら立っている太田。

太田「否定しないんですね」

久坂「事実だからな」

太田「なんで？」

久坂「……羊は1匹だ」

ぼそつと呟く久坂道朔（16）。

○ フルーツパーラー（夕）

苺パフェを食べている夏希。

夏希「ひつじは、いっぴき？」

太田「羊のカード、久坂さんが1枚なくしている」

太田を見る夏希。

太田「文化祭前に久坂さんは羊のカードをなくした。文化祭が終わって1週間後に暴力事件を起こした。そして、停学の後、部活を辞め、始まったんだ。文化祭前と後、ボドゲ部に何かあったと思わないか？」

夏希「……ねえ、私のことは夏希でいいよ。で、太田君のことも夏輝って呼んでいい？」

太田「いいけど」

夏希「ボードゲーム好きはねえ、謎解きも好きなんだ。さあ、なつきコンビで解決しようじゃない。この謎を」

太田「……ありがとう」

夏希「でもどう調べるの？ 部活の先輩は話したがってないし」

太田「誰から久坂さんの噂を聞いた？」

夏希「色々だけど、最近だと、2年生のお姉ちゃんがいるっていうクラスメイトから聞いたよ」

太田「その2年の姉に話聞けるか？ 夏希」

パフェの最後の一口を食べ、笑う夏希。

○ 富野高校・校門前（朝）

横1列に歩いている生徒たち、後ろを見て、道をあける。

歩いてくる久坂。

後ろから久坂を見ている夏希。

○ 同・1年5組教室

生徒が帰っていく教室。考え込んでいる太田。

夏希「夏輝！」

近づいてくる夏希。

○ 同・1年廊下

5組の教室から出てくる夏希、あとから太田。

太田「もう来てるのか？」

夏希「名前は石葉さん。お姉さんが菜緒先輩。妹が文花ちゃんね。話があるって言ったらうちの教室まで来てくれるって」

1組の教室へ歩いていく夏希と太田。

○ 同・1年1組教室

教室に入ってくる夏希、太田。

夏希「お待たせしましたー」

座っている菜緒。

菜緒「文花は部活行っちゃったよ。2人？」

夏希「はい。安久夏希です。こっちが私の友達の太田夏輝君です」

太田「太田です」

菜緒「なつきコンビじゃん。座って座って！」

菜緒の前に座る太田と夏希。

菜緒「文花の姉の石葉菜緒です」

夏希「菜緒先輩って呼んでもいいですか？」

菜緒「いいよー。太田君はクラス違うんだよね？」

太田「僕は5組です」

菜緒「じゃあ……ボドゲ部か」

太田「はい」

夏希「菜緒先輩は何部なんですか？」

菜緒「バドミントンだよ。この話終わったらすぐ体育館行かないと先輩に怒られちゃう。先輩怖いんだよ」

夏希「じゃあ手短に」

菜緒「久坂の話、だよな？」

夏希「はい。部活の先輩はなかなか教えてくれなくて……」

菜緒「当事者だもんね」

太田「久坂さんはその、暴力事件を機に変わったって聞いてるんですけど合ってますか？」

菜緒「もともと態度は悪かったみたいだけど、そうだね。1クラスに収まっていたのが学校中に広がったって意味ならそうだね。停学明けてからだった」

夏希「学校は処分とかしなかったんですか？」

菜緒「事件以降は、直接暴力をふるったわけじゃないからね。教師に言ったら、どんな目にあうかわかんないしね」

太田「そのなんで、暴力事件になったんですか？」

菜緒「女癖悪い久坂を諫めようとした男子に逆切れしたって噂。実際女子がそのあと辞めてるし」

太田「久坂さん以外に辞めた人がいるんですか？」

菜緒「え、ああ。うん。久坂に恫喝されてたみたいだったし、彼女に聞くのが一番早いかもね」

太田「なんて人ですか？」

菜緒「山田京子。2年生だよ」

夏希「紹介してもらえますか？」

菜緒「私？ 仲良くないから。ごめん。そろそろ部活行かないと」

夏希「忙しい中すみません。ありがとうございました」

菜緒「またね」

太田「ありがとうございます」

手を振って教室を出ていく菜緒。

座っている太田と夏希。

夏希「山田先輩か」

太田「先輩に聞けるか。俺からだと言戒されるから、久坂さんのことはほのめかさずに」

夏希、スマホを見て

夏希「今、船木先輩、部室にいるって。行こう」

立ち上がる太田。

○ 同・ボードゲーム部部室

問題集を解いている船木。

船木「あれ、夏希ちゃん、太田君」

部室に入ってくる太田と夏希。

夏希「お疲れ様ですー。チャット見たら、今日船木先輩部室いるって言ってたんで来ちゃいました」

船木「宿題してたんだよ。2人が来たなら何かボドゲやろうか」

船木、立ち上がり、棚のボードゲームを触り始める。

夏希「2年の女子の先輩がいたって聞いたんですけど」

船木、手が止まる。

夏希「名前は、山田京子」

船木「……誰に聞いたんだ？」

夏希「私のクラスメイトのお姉ちゃんが2年生で、私がボドゲ部は女子1人で寂しいですって話をしてたら、教えてくれたんです。

よかったら紹介してもらえませんか？」

船木「……（ぼそと）俺が？」

太田「何かあるんですか？」

船木「いや、別に……京子ならちゃんと話してくれるよ。2組。まだ教室いると思うよ。行ってきたら？」

夏希「ありがとうございます。夏輝も連れてきますね」

船木「おう」

太田「行ってきます」

教室を出ていく太田と夏希。

船木、スマホを取り出す。

○ 同・2年廊下

歩いている太田、夏希。

夏希「船木先輩、山田先輩と何かあったのかな」

太田「辞めたときに何かひと悶着あったか」

2組の教室の前につき、教室を覗く2人。

夏希「あ、特徴聞くの忘れた。誰が山田先輩か分かる？」
首を横に振る太田を見て、夏希、教室に入る。

○ 同・2年2組教室

夏希、廊下側の生徒に近づき

夏希「あの、山田、山田京子先輩いますか？」

生徒、教室を振り返り

生徒「ちよつと待ってね。山田さん！ この子たちが用事って」

夏希の近くに、太田も歩いてくる。

スマホを見ていた山田京子（16）、立ちあがる。

夏希「あの人？ めっちゃ可愛くない？」

息をのむ太田。

2人の正面まで歩いてくる京子。

京子「ええと、私に用事ですか？」

夏希「安久夏希です。ボドゲ部の1年です。隣が」

太田「同じくボドゲ部1年の太田夏輝です」

京子「ボドゲ部の後輩ちゃんか。元ボドゲ部の山田京子です。よろしく」

夏希「あの、それで話したいことがあって、よかったらちよつと場所移動して……」

久坂「それはできない相談だな」

3人がいる反対のドアから歩いてくる久坂。

太田「久坂さん……」

久坂「お前らは俺たちの恋路の邪魔をするのか？」

夏希「恋路？」

久坂、無理やり京子の肩を掴み、

久坂「デートだ」

縮こまっている京子。

夏希「嫌がつてるじゃないですか」

久坂「同意の上だよ。なあ？」

堪忍したかのように頷く京子。

夏希「無理やりですよね？」

久坂「じゃあ、お前が聞いてみるよ」

夏希「山田先輩、嫌なら嫌って言うってください」

京子「私は、大丈夫だから」

久坂「邪魔」

京子を連れて歩こうとする久坂。

太田「久坂さん」

久坂「なんだ？」

太田「なんでこんなことしてるんですか？　こんなことする人じゃなかった。僕を救ってくれた久坂さんはどこにいったんですか？」
久坂「……あれは、失敗だったな。勝手に口出して、お前、何も学ばないな。いや、だから虐められんのか。消えろカス」

何も言えなくなる太田。

俯く太田を見て、久坂、京子を連れて行こうとする。

夏希「ちよつと待ってください！」

久坂と京子の前に立ちふさがる宮下翔太（17）。

宮下「待てって言われてるぞ」

久坂を睨みつける宮下。

久坂「宮下先輩、何か用ですか？」

宮下「山田、大丈夫か？」

困った表情を浮かべる京子。

久坂、京子を見て

久坂「京子、デートはまた今度だ」

宮下「帰るのか？」

久坂「教師でも呼ばれたら怖いですからね」

睨む宮下の横を抜け、去っていく久坂。

宮下「山田、大丈夫だったか？　何かされたら俺に言えよ。な？」

京子「大丈夫です。ありがとうございました」

京子、宮下に頭を下げ、太田と夏希に近づき

京子「ごめんね。なんだっけ？」

夏希、太田を見る。

打ちひしがれている太田。

夏希「今日の出直してきます」

京子「そっか。またね」

京子、太田と夏希に背を向け歩き出す。

宮下「山田！」

舞「宮下君！　先生呼んでるよ」

肩を震わせる京子。

宮下「おう。今行く」

京子の方を見ながら去っていく宮下。

夏希「久坂さんのことショックだった？」

呆然と立っている太田。

夏希「部室、いや夏輝の教室で待っててよ」

歩いていく夏希。

○ 同・階段

前川舞（17）に続いて、階段を下っていく宮下。

宮下「先生の用事って何？」

舞、振り返り、

舞「ああ、なんだっけ。忘れちゃった」

宮下「忘れたって。前川……」

舞「忘れるってことは、たぶん大事な用じゃないから大丈夫だよ」

楽しそうな舞。

○ 同・1年5組教室（夕）

沈鬱な表情の太田。太田の席の前にコンビニスイーツが置かれる。

夏希「買ってきた。夏輝の分もあるから食べな」

夏希、太田の前の席で後ろ向きに座り、自分の分をコンビニの袋から取り出し、食べ始める。

夏希「嫌なことがあったら、甘いもの。甘いものが、すべてを解決するんだよ」

太田「……ありがとう」

スイーツを幸せそうに食べる夏希。

夏希「明日、もう1回山田先輩に聞いてみる？」

太田「まだ調べる気なのか？」

夏希「だってあの宮下先輩のことも山田先輩のこともカードのこと
もまだ分かってないじゃん」

太田「……そうだな」

スイーツを食べ始める太田。

夏希「でも、久坂さんも教師は怖いんだね」

スイーツを食べるのをやめる太田。

夏希「1回停学処分食らってるからかなあ」

太田「変だ」

夏希「何が？」

太田「……中学の時、俺がいじめられてたって話したな」

夏希「海老名結花だっけ？」

太田「ああ。俺は当初、解決を教師に頼った。でも直接の暴力がないことを理由に教師は対応してくれなかった。それを久坂さんは知ってる。この学校でも暴力事件以降、久坂さんは暴力をないことを理由に処分されていない。そして今日、山田先輩は暴力ではなく、あくまでも自分の意志で久坂さんに従おうとしていた。久坂さんが『教師でも呼ばれたら怖い』なんて言うわけがない」

夏希「じゃあ、なんで？」

太田「久坂さんは本気で山田先輩を誘いに来たわけじゃなかった。目的は別にあつた。そう。宮下先輩が来た時点で既に目的は達成していた。だから適当な理由を作り上げて帰った。本当の目的は俺にこれ以上、調べさせないこと、俺の心を折ること……」

夏希「考えすぎな気もするけど、やっとならなくなってきたじゃん」

太田「そうになると、次は……」

夏希「もう1回山田先輩のところ行く？」

太田「いや、山田先輩は久坂さんと口裏を合わせて演技してるかもしれない」

夏希「演技？ 流石にそれはないんじゃない？」

太田「分からない。でも信頼はできない」

夏希「じゃあ、どうするの？」

太田「1つ、宮下先輩は3年だ。2つ、船木先輩は、山田先輩のことを話したがってない。西村先輩が山田先輩と仲良かったとはあまり思えない。3つ、カードを作ったのは去年の3年生。一番関係が深かったのは今の3年生」

夏希「佐々木先輩？」

太田「佐々木先輩から宮下先輩、山田先輩、カードの先輩について聞きだそう」

満面の笑みでスイーツを食べている夏希。

○ 同・3年3組教室

弁当を食べている生徒や参考書を開いている生徒。
友達と談笑している佐々木。佐々木のスマホに夏希か
ら通知。

○ 同・空き教室

夏希のスマホがバイブ。

太田と夏希、スマホを見ている。

夏希「1回で次の話題。2回連続なら話自体を切り上げる」

太田、頷いて空き教室を出ていく。

夏希、スマホをポケットに入れる。

○ 同・踊り場

イヤホンをつけて、スマホで夏希との通話画面を見て
いる太田、壁にもたれかかっている。

○ 同・空き教室

座っている佐々木。

佐々木「……そうか……理由だけ聞かせてもらえないかな」

佐々木の正面に座っている夏希、ポケットに手を突っ
込んでいる。

夏希「私以外、女子1人もいないじゃないですか？」

佐々木「……それが部活を辞めたい理由か」

夏希「2年の女子の先輩も辞めちゃったって聞いたんですけど、な
んで辞めたんですか？」

佐々木「……それは言えないよ。プライバシーの問題だ」

ポケットのスマホが一度バイブ。

夏希「宮下先輩と関係あったりするんですか？」

佐々木「宮下？ なに。なんで？」

夏希「山田先輩がその人と話してるのを見たんです。3年ですよね？」
佐々木「……宮下君は、あんまり関わりないから、分からないけど」

ポケットのスマホが一度バイブ。

夏希「でも文化祭での自作ボドゲには興味あります！」

佐々木「え、うん。作ってみたいなら協力するよ。全力で」

夏希「去年はどうやって作ったんですか？」

佐々木「岸先輩が作ったからなあ。あ、去年の3年な。岸洋輔先輩」

夏希「ええと文化祭って11月ですよ？ 11月までボドゲ作っ

てて大学受験とか大丈夫だったんですか？」

佐々木「岸先輩なら、草大に行ってるよ。文学部だったかな」

夏希「連絡とか取ってるんですか？」

佐々木「あんまり愉快的先輩じゃないんだ」

ポケットのスマホが二度バイブ。

夏希「部活の件、考え直してみます。ありがとうございました！」

キョトンとする佐々木。

○ 同・踊り場

スマホを触っている太田。

歩いてくる夏希。

夏希「あれでよかった？」

太田、夏希にスマホを見せる。

岸のSNS画面。本名、大学名、ボードゲームが載っ

ている。

夏希「やるじゃん。DM送った？」

太田「連絡待ち」

夏希「じゃあ、一応カードの先輩はクリアだね。残ってるのは山田

先輩と宮下先輩か」

太田「宮下先輩のことは菜緒先輩に聞けないか」

夏希「え、ああ、部活のつながりで3年の誰か紹介してもらえるか
もしれないもんね。分かった。今日の放課後聞いてみるよ」

太田、スマホを見て

太田「岸先輩、連絡来た。今日の放課後、大学で会ってくれるって」

スマホに映る岸からの通知。

○ 同・体育館（夕）

菜緒と舞がバドミントンをしている。

夏希、扉の隙間から体育館を覗くのをやめ、スマホで「部活終わってから聞く」と太田にメッセージ。

○ 草野大学・カフェテラス（夕）

大学生が集っている。

太田、テラス席で立ち止まり、

太田「岸さんですか？」

座っている岸洋輔（18）、顔を上げる。

○ 富野高校・体育館・外（夕）

靴箱にもたれかかってスマホを見ている夏希。

体育館の扉が開き、生徒が出てくる。

女子生徒と談笑しながら出てくる菜緒、夏希に気づき

菜緒「ごめん、先行って。夏希ちゃん？ どうした？」

夏希「菜緒先輩、お疲れ様です。あの聞きたいことがあって」

菜緒「おーなにになに？」

夏希「あの、3年の宮下先輩って知ってますか？」

菜緒「え、なんで？」

けげんな表情をする菜緒。

舞「宮下君がどうしたの？」

菜緒と夏希の背後から近づいてくる舞。

夏希「えっと」

菜緒「（舞を指し）前川舞先輩。（夏希を指し）1年の安久夏希ちゃんです」

舞「私、宮下君とは3年間同じクラスだから、よく知ってるよ。そうだな。着替えてからでよければ校門の近くで待っててくれる？」

夏希「大丈夫です。ありがとうございます！」

歩いていく舞と菜緒に頭を下げる夏希。

○ 草野大学・カフェテラス（夕）

太田、コーヒーを持って岸のいるテラス席に座る。

太田「すいません。お時間ありがとうございます」

岸「いいよ。やることなかったし。太田君だよな？」

太田「はい」

岸「で、羊のカードのことだっけ？」

太田「はい」

岸「あれは、有名な古典をベースに作ったんだよ。イラストは俺が描いたんだけど」

太田「羊だけ文字になってますよね？」

岸「なんか聞いた？」

太田「久坂って人がなんかしたとか」

岸「君は、嫌な話を思い出させてくれるな」

太田「すみません。迷惑でなければお話聞かせてもらえますか？」

岸「文化祭前日まではあったんだよ」

ため息をつき話し出す岸。

○ 富野高校・ボードゲーム部部室・回想（朝）

机の上に置いた羊のカードの束を手取る岸。岸、カードをめくっていくが、手が止まる。

岸N「俺は、文化祭当日7時に学校に来た。そして前日机の上に置いていたカードの束を見ると羊のカードがなくなっていた。前日に部室の鍵を閉めたのは俺。閉門ギリギリだった。そうなるカードがなくなったのは当日開門してから俺が来るまでの間。職員室で鍵のことを聞いてみたら、案の定、俺が来る前に誰かは分らないが、どこかの鍵を借りて返した人がいたという」

佐々木、船木、西村、京子が岸の前に並ぶ。

岸N「まずは部員の中から犯人を捜すことにした。集合時間までに佐々木、船木、西村、山田が揃った。全員のアリバイを確認しているところで久坂が来た。遅れてきた久坂に状況を説明すると、奴はこう言った」

久坂「捨てましたよ。岸先輩、ムカついてたんで」

笑う久坂。

○ 草野大学・カフェテラス（夕）

顔をしかめている岸。

太田、岸に向かつて

太田「久坂さんのアリバイはなかったんですか？」

岸「アリバイも何も自分で白してるやつに確認する必要はないだろ」

太田「動機はムカついてた、だけ？」

岸「どうでもいいだろ。理由なんて。どうでもいい」

太田「当日のことを時系列で教えてもらえないですか？」

岸「なんで？」

太田「嫌なことを思い出させてしまったみたいなので、ここまで来たら全部話してもらった方がすっきりするかなと」

岸「6時半開門。7時に俺が部室に到着し、カードの紛失を発見した。その後西村が到着。西村と教室を搜索後、西村は留守番、俺は職員室で鍵について聞きに行った。俺が帰ってきてから、船木、佐々木、山田の順に部室に到着した。集合時間になってアリバイの聞き取りを始めた。途中で久坂が到着し、自白した。以上だ」

太田「詳細、ありがとうございます」

岸「こっちは話してたら腹立ってきたけどな」

太田「アリバイってどんなこと聞いたんですか？」

岸「親に家を何時に出たか聞かせた」

太田「久坂さん以外の人のアリバイはあったんですか？」

岸「山田以外はあったはず。山田は親がもう家を出てたとか」

太田「そのことも全部久坂さんには伝えたんですか？」

岸「状況を説明してくれって言ったからな。どんな気持ちで聞いてやがってたんだ」

テーブルの足を蹴る岸。

太田「久坂さんはそのあと、暴力事件を起こしてますよね？」

岸「船木を殴ったやつか」

太田「船木先輩？」

岸「俺も詳しくは知らねえけど、久坂に彼女がいたのに山田と仲良

さそうだったのを見て、船木が突っかつたんだろ。で、久坂がキレて殴った。しょうもない。結局山田もいられなくなって部活辞めたしな。まあ、山田も自分が蒔いた種だな」

太田「山田先輩は、何したんですか？」

岸「山田、文化祭の前に船木を振ったんだよ」

鼻で笑う岸。

○ 富野高校・校門前（夕）

鼻で笑う舞。

舞「山田さん、文化祭の前に宮下君を振ったんだよ」

校門を出て歩いていく舞、菜緒、夏希。

舞「一目惚れして告って振られたんだって。宮下君も馬鹿だよな。」

安久さんは山田さんと仲いいの？」

夏希「仲いいというか、部活の元先輩です」

舞「宮下君とは話したことあるの？」

夏希「私ですか？ ないですよ。1回見ただけです」

舞「そう」

沈黙が生まれる。

菜緒「（沈黙を埋めるように）夏希ちゃん、ローファー、可愛いね」

夏希が履いているのは茶色のタッセルローファー。

夏希「可愛いですよ。お気に入りなんですよー」

舞「そういえば宮下君を山田さんに紹介したのもボドゲ部の人だったなあ。そいつが紹介しなければ告白なんてしなかった。誰だったか……佐々木？」

夏希を眼光鋭く見ている舞。

○ 同・ボードゲーム部部室

佐々木が入ってくる。

佐々木「どうしたんだ？」

太田を中心に座っている夏希、船木、西村。

夏希「先輩方に話があります」

佐々木も輪に加わり

佐々木「まさか太田君もなのか。まだ結論を出すのは早い。話し合おう」

船木「何の話っすか？」

佐々木「部活を辞めようか迷ってるんだよね？」

船木「よし。話し合おう」

太田「船木先輩は山田先輩に振られたんですよね」

船木、佐々木、西村の視線が太田に集まる。

船木「……どこから？」

太田「すみません。岸先輩に聞きました」

船木「岸先輩？ 岸先輩ってあの」

佐々木「すまん。俺が夏希ちゃんに教えた。でも連絡先は」

太田「こつちで勝手に特定しました。すみません。けど、もう1人

山田先輩に振られている人がいます。宮下先輩。佐々木先輩が宮

下先輩に山田先輩を紹介したんですよね？」

佐々木「……どこから？」

夏希「3年の先輩から聞きました」

佐々木「お前ら……」

太田「で、西村先輩が羊のカードをなくした」

西村「は？」

太田「それを久坂さんがかばった。とにかく、皆さん、それぞれ山

田先輩もしくは久坂さんに後ろめたいところがあつた」

西村「おい。待て！ 俺がいつ認めた？ 岸先輩が、俺がやったって言ったのか」

太田「いえ、岸先輩は久坂さんが自分にムカついてやったと言っていました。でもそんな嫌いな人のために、わざわざ朝早く起きて羊のカードだけ捨てるなんてことしますか？」

西村「そんなん知らねえよ」

太田「そうです。誰も知らない。岸先輩がその場で問い詰めてないんです。岸先輩にとって相手の言い分なんてどうでもよかったんでしょうね。岸先輩は怒ったら人の言い分も聞いてくれない人じゃないですか。だから愉快な先輩ではない。もし悪意がなく、カードをなくしたとしてもその言い分は聞いてもらえなかった」

西村「それで俺が、カードをなくしたっていうのか」

太田「部員の中で明確に西村さんだけ、岸先輩がいないタイミング

で1人で部室にいたんです。岸先輩が職員室に鍵のことを聞き取りに行ったタイミングで。羊のカードだけどっかに落ちてたんじゃないですか。間違えて踏んで言うに言えなくなった、とか？」

西村「なんで？」

口に手を当てる西村。

西村「カマかけたのか？」

太田「可能性としては高いかなと。でも、ほんとだったみたいです
ね」

西村「これは、いや、違くて」

船木「西村」

西村「え？」

西村に頷いて見せる船木。

西村「……ただ床に落ちてたんだ。岸先輩も冷静になれば見つけてたはずなんだ。それだけだったんだ。でも俺が踏みつけていた。ぐしゃぐしゃになったカードを見られるわけにはいかなかった。

岸先輩に見つかったらなんて言われるか……」

太田「そんな時に久坂さんが名乗り出た。当時、山田先輩は船木先輩を振って、しかもそれは岸先輩も知っていた。おそらく久坂さんも知っていた。そして山田先輩にはカードのアリバイがなかった。その状況でカードをなくしたとレッテルを貼られると部活に居づらくなる。だから久坂さんは自分が犯人だと名乗り出た」

船木「理由までは俺たちには分かんねえよ」

太田「その後、久坂さんは暴力事件を起こした。その被害者は船木先輩ですね」

船木「……京子が久坂に気があるのは分かった。なのに、久坂は中学の後輩の女の子と付き合ってるみたいだった。だから、それで口論になったんだ」

太田「そういう筋書きですよね。久坂さんは、船木先輩の後ろめたさに付け込んで、お願いしたんじゃないですか？ 暴力事件の被害者になつてくれと。そして、西村先輩と佐々木先輩にも付け込んで口裏を合わせるようお願いした。違いますか？」

船木「疑うならその彼女にも聞いてみればいい。名前は、確か……
海老名結花」

夏希「……海老名結花って」

夏希、太田を見る。
啞然としている太田。

○ 同・同（夕）

夕陽が差し込んでいる。
佐々木「じゃあ、鍵は頼むな」
船木「お疲れ」

ドアが閉まる。部室に残っている太田と夏希。
夏希「羊のカード事件、解決したね。あれだけの情報で解決するのは。さすがだよ。名探偵君」

太田「あれは、船木先輩と佐々木先輩が山田先輩に後ろめたいことがあったから、西村先輩にも何かあるんじゃないかってギャンプルだよ。西村先輩がボロ出すことに懸けた」

夏希「西村先輩、結構感情出るもんねー。でもさ、久坂さんは西村先輩がやったって気づかなかったんでしょ。自分が泥被ったってことはさ。夏輝、久坂さんを越えたね」

太田「……海老名結花か」

夏希「私から連絡してみようか？」

太田「……いや、まずは山田先輩に聞いてみよう」
打ちひしがれている太田。

○ 同・1年1組教室

夏希のスマホに、太田からのメッセージ。「ごめん今日学校休む」。「私1人で聞いてみるよ」「お大事に」と返信する夏希。

夏希、立ち上がり

千綾「夏希！ 今からカラオケ行かない？ 金曜だよ。金曜！」
歩いてくる千綾。

夏希「ごめん。ちよつとやることあるから」

千綾「えー、球技大会の種目の話もしたかったんだけど」

夏希「来週ね。じゃあまた」

夏希、歩いていく。

○ 同・空き教室

窓まで歩いてくる京子、振り返る。

京子「太田君には、お大事にって言っておいて」

後ろから歩いてくる夏希。

夏希「……山田先輩は、なんで部活辞めたんですか？」

京子「色々聞いてるんだっけ」

夏希「カードのこと、アリバイのない山田さんを久坂さんがかばったこと、知ってます。船木先輩とのことも……この前の久坂さんが来た時のことも演技だったんじゃないかってことも」

京子「そんなことも聞いてるのか。将来は女優にでもなろうかと思っただけだな」

夏希「なんで？　なんで部活を辞めたんですか？」

京子「……久坂君を1人にしたくなかったから？」

舞「山田さん」

夏希、ドアの方に振り返る。

歩いてくる舞。

夏希「前川先輩、どうしたんですか？」

舞「山田さん、宮下君と話したんだって」

京子「いや、そんなことは」

舞「……久坂と話してた時、助けに来たんだろ」

京子「……ああ、来ました。でも特段話してはないですよ」

舞「特段？」

夏希「あの！　私その場にいたけど話してはなかったですよ。大丈夫？　って聞かれて大丈夫。って答えるくらいです」

舞「だから話してんじゃない」

夏希「え？」

夏希を睨む舞。

舞「もういいや。じゃあね」

歩いていく舞。

夏希「機嫌悪そうでしたね」

震えている京子。

京子「今日はもう帰ってもいいかな」

夏希「大丈夫ですか？」

弱々しく去っていく京子の後姿。

○ 同・校門前（朝）

雨が降っている。傘をさして登校してくる生徒たち。

○ 同・階段（朝）

雨に濡れた鞆を持って歩いている太田。

夏希「夏輝、おはよう」

後ろから、服を少し濡らした夏希。

太田「おはよう」

夏希「体調、元気になった？」

太田「週末ずっと寝てたから」

夏希「よし。今日の帰り、パフェ食べに行こう！ 今週からの期間限定！」

太田「……作戦会議だな」

太田に笑みを見せる夏希。

○ 同・1年1組教室（朝）

雑談に花を咲かせている生徒たち。

夏希、教室に入り。

夏希「おはよう！」

夏希に反応しない生徒たち。

夏希、机に鞆を置き、千綾の席に行く。

夏希「おはよう。球技大会の種目の話なんだけど」

夏希と目を合わせない千綾。

夏希「千綾？」

文花「千綾ちゃん！」

文花が席で手を上げている。

千綾、文花の席に向かう。

残される夏希。

○ 同・校門前

雨の勢いが強まっている中、帰っていく生徒たち。

○ 同・1年廊下

壁にもたれている太田、スマホを見つめている。

夏希「さあ、パフェを食しにレッツゴー！」

笑顔で歩いてくる夏希。

○ 同・昇降口

太田、靴を履き、昇降口まで歩く。

太田「夏希？」

靴箱の前に立っている夏希、笑顔が歪む。

○ 同・廊下

探しながら歩く太田。

夏希声「今日、クラスで無視されて陰口言われてるみたいで見つからない。」

○ 同・空き教室

部屋を見渡す太田。

夏希声「前川先輩から石葉姉妹かな」

見つからない。

○ 同・体育館・渡り廊下

雨で泥が跳ねる。歩いてくる太田、立ち止まる。

夏希声「ローファー、お気に入りだったんだけどなあ」

ゆっくり歩きだす太田。

○ 同・同・外

靴箱の前に呆然と立っている太田。
泥まみれの茶色のタッセルローファー。
雨が横殴りに降っている。

○ 同・2年4組教室（朝）

談笑している生徒たち、話すのをやめる
教室に入ってくる久坂、席へ向かう。
久坂、机の引き出しからカードを取り出す。
「羊」のカード。

○ 喫茶店（夜）

歩いてくる久坂、席に着く。
正面に座っている太田、顔を上げる。

太田「コーヒーでいいですか？」
久坂「ああ」

太田、手を上げると店長が近づいてくる。
久坂「コーヒー、ホット、ストレートをお願いします」
店長「かしこまりました」

はけていく店長。

久坂、テーブルに羊のカードを出し、裏向けると「本
日、19時、喫茶店で」と書いてある。

久坂「どこの喫茶店かは書いとけよ」

太田「友達が虐めのターゲットになりました」

久坂「虐め。誰が？」

太田「前川舞」

久坂「前川？」

太田「友達は、山田先輩と宮下先輩の話をしていたんです。前川舞
は相当宮下先輩にご執心みたいですね。でも、これで全て分か
りました」

久坂「友達って、安久夏希か？」

太田「文化祭前、宮下先輩は山田先輩に告白をして振られた。前川舞は山田先輩に何をしたのか。夏希を見ればなんとなく想像はできます。文化祭の頃には、虐めは始まっていたんでしょう。文化祭で久坂さんが山田先輩をかばったのは、既に山田先輩が学校内で居場所を失いつつあったから。部活という山田先輩の居場所を守りたかったから」

店長、ホットコーヒーを持ち

店長「こちら、ホットコーヒーです」

久坂「ありがとうございます」

はけていく店長。

久坂、コーヒーの香りをかぐ。

太田「文化祭後、久坂さんは暴力事件を起こした。山田先輩の学校での居場所を取り戻すため。久坂さんは、虐めの傍観者でいられる人ではないから。でもこの時点で、久坂さんは虐めの解決策の2つの失敗を知っていた。1つ目は大人に助けを求めるやり方。僕が試した方法。2つ目は自分が虐めの本人に介入するやり方。僕を救った方法。久坂さん、西村先輩がカードを盗ったこと、岸先輩から話を聞いた時点で、分かっていたんじゃないですか？ 久坂さんほどの洞察力がある人が、その場において、感情の分かりやすい西村先輩を見ぬけなかったとは思いません」

久坂「西村もひどい言われようだな」

太田「海老名結花は、孤独なまま転校するという末路をたどった。

久坂さんは、それを失敗だと言った。西村先輩がカードをなくしたとその場で言わなかったのは、西村先輩が孤立して部活を辞めるのを避けるため。久坂さんはこの2つの失敗から、学んだ。そして山田先輩を救い出すために取った方法が、自分自身を畏怖の対象にしてしまうこと。その領域に山田先輩を入れることで、虐めの手を遠ざける。そのために山田先輩、久坂さんに負い目のあった船木先輩、佐々木先輩、西村先輩と口裏を合わせて暴力事件を創り上げ、今のポジションを築いた」

久坂「……海老名の件は、悪かったな。海老名がお前にとって加害者なのは知っていた。でも、俺の被害者でもあった。転校先が偶然同じで面倒見てたんだ。別に恋人でも何でもない。ただリアリ

ティを増すために名前を貸してもらった」

太田「……否定しないんですね」

久坂「事実だからな」

太田「なんで？」

久坂「傍観者は加害者と同罪だ。でも、どうすればいい？ 圧倒的な力を持った1人の支配下に学校を置く。その1人に敵意も嫌悪も恐怖を全て集めて、虐めが起きないようにその1人が管理する。それが俺の答えだ」

太田「なんで『羊が1匹』なんて言ったんですか？」

久坂「いなくなるのは……」

答えるのをやめ、コーヒーを飲んで一息つく久坂。

太田「苦しかったから。俺には気付いて、理解してもらいたかったからじゃないんですか？」

久坂「……夏輝、お前は どうするんだ？」

太田「俺、俺は……」

久坂「傍観するか？ 大人に相談するか？ 直接介入するか？ 自分がターゲットになるか？ お前も羊になるか？」

久坂、伝票をもつて、立ち上がる。
残される太田。動かない。動けない。

○ 富野高校・ボードゲーム部部室

夏希、部室のドアを開ける。
誰もいない。

夏希、羊のカードの束を手取る。

カードを順番に見るが、「羊」のカードがない。

× × ×

太田が部室のドアを開ける。

夏希、顔を上げる

夏希「お疲れ。まだ先輩たち来てないよー」

太田、夏希の正面に座る。

夏希「羊のカードなくなってたから書いてみたんだけど、どう？」

夏希、大きく「羊」と書かれたカードを出す。
机に置かれた夏希の筆箱。汚された跡がある。

太田、鞆からカードを出す。

太田「羊は2匹だ」

「羊」と大きく書かれたカードが2枚。

了